

31. 片麻痺の足関節機能再建手術の評価 —手術適応について—

吉永勝訓 (千大)
窪田俊夫, 三島博信, 音琴 勝
(中伊豆リハセンター)

片麻痺の足関節機能再建術の手術適応を, その目的から, 1) 装具を履かせるための手術, 2) 金属支柱付装具をプラスチック装具に替えるための手術, 3) 装具を外すための手術, 4) 歩行パターン改善を目的とした手術, の4段階に設定した。適応3) 4) により手術を行った症例の術前術後歩行分析を比較検討した。手術適応を段階4) まで拡大した場合には, 足関節運動が分離している症例も手術適応に含めることができると考えた。

32. センターに於けるリハビリテーション医療の現況

佐々木 健
(県リハビリテーションセンター)

33. 脳卒中片麻痺患者の障害観について

長尾竜郎, 野口哲夫
(富山県高志リハビリ病院)

脳卒中患者にリハビリを進めるに当り, 本人の考え方に乗って行うことが重要と思われる。

演者は患者の障害観という主観的情報を客観化, 数量化する方法を開発・試行して来たが, 今回は北陸, 九州, 韓国の脳卒中患者, 99人, 19人, 20人の障害観を比較して, 北陸患者にリハビリ指向性の低いこと, 韓国患者に生きがい喪失観が低いこと, 等を示し得た。

34. 除痛を目的とした動脈塞栓術の検討

湯山琢夫 (千葉市立)
鎌田 栄 (千大)
李元浩 (同・放射線)

6例の悪性腫瘍患者に対し, 除痛を目的として腫瘍栄養動脈塞栓術を施行した。塞栓動脈は内腸骨動脈4例, 大腿深動脈1例, 肋間動脈1例であり, gelfoam 細粒又は Ivalon 細粒を用いた。hypovascular tumor 2例を含む5例に自覚症状の改善や鎮痛剤使用の減少が得られたが, 転移性脊椎腫瘍に圧迫骨折を合併した例には無効であった。動脈塞栓術は, その手技に熟達すれば安全で全身状態不良の症例にも適応されるので, 従来の治療法と並んで試みて良い方法と思われた。

35. Epithelioid hemangioendothelioma の1例

熊谷好正, 高橋淳一, 小林紘一
小野 豊, 林 謙二, 小野 彰
和田佑一 (千葉労炎)
丸山直記 (同・病理)
高田典彦, 保高英二
(県立がんセンター)

43歳女性で背部痛を主訴とした, 極めて稀な腫瘍である epithelioid hemangioendothelioma の1例を経験したので, 文献的考察を加えて報告した。

第3胸椎を主とした多数の骨及び肺に病変を認めたが, 原発不明であり, 脊髓麻痺症状に対して椎弓切除術, 術後照射, 化学療法を施行して著しい改善を得た。病理組織学的には, 上皮様配列をなし, 単一細胞による管腔形成傾向を示し, 細胞内に第8因子関連抗原を認めた。組織学的には良性と悪性の中間型であるが, 臨床的には悪性である。

36. 多発神経腫

—最近経験せる3症例について—

遠藤富士乗, 堂後昭彦
(船橋医療センター)
今井克己, 石井 猛 (千大)

昭和58年以来千葉大学ならびに船橋市立医療センターにて手術(摘出術)を行った同一四肢に発生した多発神経鞘腫を3症例に経験したので報告する。

病理組織学的にも臨床的にも神経鞘腫と同定され, 術後経過も良好であった。文献的には, Seddon によれば同一肢多発神経鞘腫は, 全神経鞘腫の2%と少ない発生であり, 3症例と少ないが報告する価値があるものと考ええる。

37. 良性骨腫瘍に対する治療法

梅田 透, 高田英二 (県立がんセンター)
石井 猛 (千大)
遠藤富士乗 (船橋市立医療センター)

良性骨腫瘍は一般外来においても比較的多くみることができる。しかしその治療法は一律でないため現在我々の治療法の原則を述べた。手術適応は①疼痛, 変形の著しい時, ②病的骨折の可能性のある時, ③急速な増大を示し悪性化が疑われる時に限り, 原則的に即手術とはしない。小児の腫瘍類似疾患は骨折の予防を目的とし自然治癒を期待する。骨巨細胞腫は別格であり時に悪性化する